



農の未来ネット

NO.53
1月号
(新年号)

特定非営利活動(NPO)法人「農の未来ネット」

理事長：倉本器征(東京農工大学名誉教授)

発行責任者：田沼 繁(NPO法人農の未来ネット事務局：電話&FAX 042-313-3620)

編集長：西村正昭

<http://www.nou-mirai.org/index.html>



「農の未来ネット」事務局長 田沼 繁

明けましておめでとうございます。本年もよろしく願いいたします。

昨年末は、東京都知事の「黒い金疑惑」で猪瀬知事が辞職に追い込まれ、年明けから知事選挙という政治状況になり、都民が「原発ゼロ社会」や、「暮らしを重視」する知事を選ぶかが一つの焦点となっています。国政では、安倍政権下で秘密保護法や靖国参拝、沖縄基地問題、消費税増税、そして農業に大きく影響を及ぼす TPP 問題など国民生活にとって看過できない課題が起こっています。ことしは、これらの課題をおおいに注視していきたいと思えます。

さて、去年は、会員・支援者のみなさまのご協力とご支援によって、みらい体験農場での作物栽培が順調に進み、こめ、サツマイモ、ジャガイモ、ねぎなど、それなりの収穫を得ました。学生の方々にも大いにご協力いただきました。ことしも、栽培に取り組みたいと思えます。お時間のある方は是非、農作業にご参加ください。農の未来ネットの主事業である農業体験プログラ

ムの取り組みでは、去年の春・夏には武蔵大学、明治大学の学生さんに農家での農業体験を、また、学生のインターンシップでは立正大学から参加をいただいています。農の未来ネットは一人でも多くの人を就農へ誘うことを目指していますので、これらの事業は引き続き強化していきたいと考えます。

当 NPO 法人は、会員の皆様の会費で運営されており、事務局では、一人でも多くの方にご加入いただきたいと考えています。会員の皆様から知人等へお声おかけをしていただきたいことをお願い、年頭のあいさついたします。

事務局一同から挨拶

■後藤 光蔵:理事

明けましておめでとうございます。

今年もよろしく願いいたします。農水省「平成24年新規就農者調査結果」を見ると、新規自営農業就業者と新規雇用就農者は前年に比べ4~5%減少している。しかし新規参入者は2,100人から3,010人に43%の増加、特に39歳以下の新規参入者は、絶対数としては少ないとはいえ800人から1,540人に90%を越える増加となっている。若者に農業の魅力が理解されるようになったからだろう。同時にその

背景には若者の働き方の大きな変化がある。これまでの学校を卒業し一斉に会社に就職し、正社員として定年まで勤めるという働き方のモデルは崩壊した。若者は職業選択とキャリア形成の多様化を余儀なくされた。農業を選択する若者が増えてきたのも日本型雇用の溶解という大きな流れのなかでの働き方の多様化の一環といえるだろう。経済構造の変化の下で従来のような日本型雇用システムに戻ることはないだろうし、戻ることが望ましいともいえない。むしろ農業への新規参入者も含め多様な働き方の中でも人間らしい生活が保障される仕組みが重要である。新規就農者の増加と定着もそのような若者たちの多様な生き方を応援する仕組みの中でもっと太い流れになるだろう。同時に農業就農者を増やすためには農業の大切さと魅力を多くの若者に知ってもらうことが大切である。農の未来ネットの取り組みが僅かであってもそのような役割を果たすことが出来るように、皆で楽しみながら力を出し合う2014年にしたいものです。



■吉田 道行:理事

去年を振り返りまして、農業を営む私にとって栽培環境が大きく変わったと思いました。気象については竜巻などの大きな災害が occurred。また、栽培技術では、オランダの施設栽培技術を取り入れ始めました。新年が明けまして、今年は穏やかに過ごしたいと願いますが、いざという時の備えも万全には行きませんが、対策を考え、農業が続けていければと思います。



■西村 正昭:編集長

今年2014年は国連が定めた「国際家族農業年」です。それは、「家族農業が飢餓や貧困の緩和、食料安全保障と栄養の提供、人々の生活の改善、自然資源の管理、環境保護、そして主に農村地域での持続可能な開発を達成することにおける重要な役割に世界の注目

を集めることを目的としている」そうです。家族農業の役割が日本でも重要だという取り組みがいろいろと行われるでしょう。農の未来ネットもその一端を担う草の根の取り組みと言えるのではないのでしょうか。今年も会員のみなさんをはじめ多くの方と共に歩んでいきたいと思えます。よろしく願いいたします。



■岩藤 一樹:事務局員

明けましておめでとうございます。

昨年末の事務局会議で新たな「みらい体験農場」の確保に関連して生産緑地制度について議論しましたが、それに関してお話をさせて頂きます。高度経済成長期の大都市圏での乱開発を防止するために'86年、線引き制度が導入され、その際、極めて広く指定された市街化区域に営農意志を持つ農家が多数存在することになりました。その救済措置として宅地並み課税を免除する生産緑地制度が設けられたことは、ご承知の通りです。しかし、人口減少が全国から大都市圏にも及び、多摩地域でも2015年をピークに人口減少が見込まれ、宅地需要も減退していく中で、市街地拡大を前提とした生産緑地制度は、その体系のあり方の転換や柔軟な運用が期待される所です。市街地縁辺部での学生からリタイアメントまでが農作業を通じて交流する「みらい体験農場」は、これから本格化する高齢社会における共助を基礎とした地域再生モデルの一つかと思われまます。

「付加価値の高い土地経営」や「農地を活かした多様なまちづくり」を進めるうえで、「農の未来ネット」は、農地提供と家庭菜園を希望する人々をつなぐチャネル機能を担う組織として期待されている初夢を見ました。



■青木 昂平:事務局員

明けましておめでとうございます。

昨年は皆様に大変お世話になりました。本

年もよろしくお願いたします。農作業について昨年を振り返ると、育苗用ハウスを一棟建てたことと、深谷ねぎを栽培したことが印象に残っています。特にねぎに関しては、2月に深谷で専業農家のねぎをよく見てきてから、みらい体験農場でも同様の苗を使った栽培を始めたため、知識や作業のコツがそれなりに身に付いたかなと思います。こうしたように、今年もまた様々な作物に触れて、その理解を深めたいです。さて、私個人の生活の話になりますが、今年からついに学生という身分を終え、社会人となります。環境や立場が一気に変わることもあって、恐らくそれなりにしんどい日々を過ごすことになるでしょう。仕事は日々勉強していかなければなりません、大学や未来ネットで培ったことを活かして、なんとかやっつけていこうと思います。少し地味ですが、「くじけず毎日コツコツ進む」ということを今年の抱負にします。農の未来ネットの活動に参加できるのは土日だけになりますが、今後とも共に取り組んでいきましょう。

◆◆ みらい体験農場 ◆◆

オラック農場長から 2013年を振り返るの巻

農場長 一之瀬今朝一(副理事長)

あけましておめでとうございます。

体験農場は、私にとって人生で初めての経験があり、昨年も実り多い年となりました。農場長として、農作業に参加され苦楽をともにした皆さまに心より感謝いたします。思いつくまま、一年間を振り返ってみます。

一つ目は、稲の育苗ハウスの建設です。吉田理事(深谷市でトマト栽培農家)が頭領となり、その日の作業内容と手順を指揮され、5日の期間で完成しました。材料は地主の細田さんが20年程前に購入していたものと、吉田さんが

用意して下さった補強するためのパイプ、留め具、アンカー(四隅に埋める螺旋状の鉄材)、被服ビニール、手動ビニール巻き上げ機、出入口等を使用し、横約10m、縦約5mのビニールハウスが出来ました。今まで稲の育苗は、ビニールトンネルで行っていましたが、育苗管理が細田さんだけに集中することをさけ労力負担も軽くすることを目的にビニールハウスを建てました。以前は、水の散布(一日2回やる必要がある)、苗が蒸れないようにビニールを開け閉めすることや雀が種籾を食べに来るので網を掛けて防ぐことから育苗に負担がかかっていた細田さんが一手に行ってくれていたところです。そこで、水がはれる(プール式)の育苗を行いました。(しかし、育苗は細田さんに一手にやっていただきました。)建設の最終のビニール張りでは、ビニールを押さえる人手がいる場面も、多くの方が参加され、問題なく張ることができました。温室やプール作りの作業など、初めての経験も知恵と工夫・・2リットルペットボトルと細い管で水平をとるなど、形を作る楽しさを感じました。

二つ目は、深谷ねぎの栽培です。(農)埼玉産直センターの参加農家の吉岡さんから深谷ねぎ苗を5月20日にいただき30坪程栽培しました。植え付けの土掛けは、根もとが埋まる2cm程度、9月下旬までそのまま、その後、3回土寄せを行いました。2回目までは難なく土を動かしましたが、3回目は、土を高く積むため、サツマイモ掘りの時に大学生にお願いしました。お陰で、ねぎは立派に成長し味も最高だと思います。貝殻石灰は入れましたが、無肥料・無農薬が原因なのか太さが不揃いなことなどねぎ栽培の大変なことが理解できました

三つ目は、水稻栽培です。田植えでは、武蔵大学の他に立正大学の学生さんが参加してくれました。泥になるので私は止めたのですが、せっかく参加したのだからと言ってミニスカートの女子大生さん3名が泥まみれになって他の参加者と一緒に作業していました。籾蒔き(育苗箱への)、田んぼの代掻きなどで武蔵大学の青

木さん、戸田さん達、立正大学の石井さん（成田から参加）、本屋さん達が積極的に参加してくれました。農場が大学の近くにあれば皆さんの交通費や時間の負担を軽くでき、もっと多くの学生さんにも自然に親しんでもらえるものと思います。

最後に、田んぼや畑の作業に家族や子供連れの方が多く参加していただいて、ほほえましく本当にうれしく思います。また、力がある仕事、身長を生かした作業などで活躍してくれた学生さん。農作業でどうしても人手が必要な場合など困ったときの西村さん頼み（機関紙編集長）ご夫婦で参加していただきました。農作業には必ず参加し張り切った田沼事務局長、中澤さん一家の力を出し切って労をいとわない姿には頭の下がる思いでいます。猛暑の夏、私は、畑仕事で熱中症になりかけ車の冷房に助けられましたが、体験農場においての参加者は怪我等の事故もなく作業ができました。皆さんの協力や思いやりに励まされました。有り難うございました。今年もよろしく願いいたします。

事務局だより 最近思うこと

「農の未来ネット」理事 吉田 道行 (埼玉産直センター所属青年生産者)

今日の食卓には、ほうれん草、ブロッコリー、ネギ、レタス、ヤマトイモと私の住むところで穫れる冬野菜がたくさん並びます。いつもあるのではなく、畑で穫ってきた物があれば、近所でもらったものなので、ある時は食べきれないほどあるけれど、ない時は、ないです。

年に一度の健康診断でメタボに認定されています。コレステロールが高いので、卵を1ヶ月やめて様子を見ようということになりました。そこで、ご飯を食べに外出すると、ほとんどのメニューが選べない。あきらめて、

家でご飯を食べました。なんとか、薬を飲んで直す前に、食事に気をつけて改善したいと思います。たぶん、アルコールを減らせばいいんだろうなあ？



編集後記

お正月に4歳の孫娘と中学1年生の孫と長男夫婦の4人が東京・目黒から埼玉県宮代町の私の家に来ました。孫に正月料理を食べさせようと煮しめやきんぴらごぼう、松前付け、田作りなどを作って食べてもらおうと思っていました。「おせち料理は食べない」と、言われました。何がいいのかというとピザ。お正月早々から配達してくれるピザを注文し、食べる羽目になりました。小さいうちから手作り料理を食べる習慣をつけてもらいたいと思っていましたが、ダメでした。私たち夫婦がポンティアで手伝っているソバ処「神間亭」（埼玉県春日部市）の隣に住む農家の倉持ふさ子さんと雑談したときに孫のピザの話をしました。倉持さんの3人の息子はすべて結婚され、お正月に孫を連れて実家に帰ってきます。倉持さんは3人のお嫁さんに一品の料理を作って持ってくるように要望しています。

「料理をすることが大切なのでなんでもいいから一品を作ってもってきてもらいます。その代り、私が作った料理をお土産に持って帰ってもらっています」という倉持さんの話には感心しました。食育が大切だといわれていますが、手作りの料理をもらっているやり方には、まさに食育の実践をみている思いをしました。農家のお母さんから教えられた2014年の新年でした。

